

第104回日本精神神経学会総会

シンポジウム

成人AD/HDの臨床像と薬物療法

松本 英夫 (東海大学医学部専門診療学系精神科学)

注意欠陥/多動性障害 (AD/HD) は児童期に限定された障害であると考えられてきた。しかし Barkley, R.A. ら (1991) が AD/HD 児の 70~80% は成人まで症状が残存するという報告をしているように、近年、多くの症例で思春期以後まで多少なりとも症状が持続することが判明して Adult AD/HD として注目が集まっている。また「自分は AD/HD ではないか」と大人になってから疑問を持ち自ら精神科を受診する成人も増加している。そこで本シンポジウムでは、まず症状の発達の变化について幼児期から成人期までを概説し、多動・衝動性は幼児期から児童期が中心で青年期には落ち着いてくること、一方、不注意症状は比

較的発症が遅く、成人期まで持続することなどを述べたい。次に AD/HD 児の追跡研究について主に欧米で報告された文献について展望する。そして東海大学医学部附属病院精神科を受診した Adult AD/HD の臨床像と薬物療法について紹介したい。臨床像では不注意優勢型が大多数を占めること、性差で女性が多いこと、並存障害が半数以上に認められていること、などが特徴であった。また薬物療法では昨年まで AD/HD の治療薬としてリタリンの効果を中心に述べたい。なお、発表にあたって症例一覧や個々の症例の呈示に際しては個人が特定できないように配慮した。

(この論文は抄録集より転載しました)